



ヘルス&ケア

12 腰痛治療の今後

腰痛について12回にわたり解説してきた。腰痛の真の姿らしきものを少しでも説明できたのであれば幸いである。最後に腰痛治療の今後について述べたい。

痛はわからないことばかり」とこのコラムで書き続けてきたが、そのメカニズムも少しずつ明らかになってきた。

以前の日本では、痛みは我慢すればよいということに積極的に対応されてこなかったが、近年、痛みは重大な症状であり除去するよう最大限の努力をすべきと概念が変わり、痛みの研究も進んでいる。「腰

痛は簡単に治せるものではなく心理社会的要因も関与しているため、整形外科やリハビリ、心療内科などの医師、理学療法士、看護師、臨床心理士などが形成するチームによる治療が理想的である。しかし、日本国内ではそのようなチーム医療が機能している施設はごくわずかである。縦割りの組織構造であることや現状の保険医療制度では、そのような治療で収益が得られないことなどが障壁なのである。治療費は増大しているが、社会貢献できる労力を腰痛でなくしている損失は大きい

腰痛 ミステリアスな難敵

“腰痛”ミステリアスな難敵



腰痛治療の今後

正しい知識とチーム医療の普及期待

予算を割くべきであろうし、腰痛に対してチーム医療ができるよう組織改変が必要である。

腰痛症に対する家庭や社会の理解も必要だ。慢性腰痛症の患者さんの話を聞くと家族や会社から「病院へ行って治してもらってこい」とか「完全に治してから会社に来るように」とプレッシャーをかけられていることが多いのだ。これらの文言は一見当然のようにも感じるが、このコラムを読んできた方であれば、それがどれほど難しいことかわかるだろう。これらのプレッシャーが腰痛の改善を遅らせているとも想像される。

腰痛は30分で治るとか、〇〇が原因だったというような単純な病態ではなく、ミステリアスな難敵である。そういう飛びつきやすい軽い情報に惑わされず、腰痛に関する正しい知識を社会全体が持ち、時間をかけたチーム医療ができるような制度が望まれる。

〓この項おわり〓

(岩井整形外科内科病院

湯澤洋平副院長)